

〔座談会〕 学生の多様なニーズと大学教育

出席者（発言順）  
**武内 清**（上智大学文学部教授）  
**谷本 啓**（大学商学部助教）  
**圓月勝博**（大学文学部教授）  
**玉井史絵**（大学言語文化教育研究センター助教）  
**中村利男**（女子大学学芸学部教授）  
 司会 本誌編集委員

司会 ●ご報告ありがとうございます。武内先生が日本経済新聞（04年10月23日教育欄）に本日のお話と同じ趣旨の記事を書いておられたのが、本日の企画のきっかけでした。一番印象に残っているのは「生徒化する学生」という新しい現象が出てきているということを定量的に指摘されていることです。私も最近同じように感じていて、それが多くの大学の調査によって裏づけられていると感じました。そこで本日はわざわざ京都までお話を伺って、詳しくご報告願おうと考えています。今日は、いまの学生がどのような状態にあるのか、それを教育する教師としてそれをどう受け止めたいのかを、いろいろな角度から考えたいと思います。

入学難易度と学生の満足度

司会 ●今の大学教育改革論の一つの弱点は、入学難易度を無視して、あらゆる大学に通用するような処方箋が議論されていることだと私は思っています。その点から言うと、武内先生の12大学調査は入学難易度が高い大学が対象となっていないですね。

武内 ●はい。偏差値が49以下の大学も1校含まれていますが、55から59までの中堅大学が7校と多く、偏差値の高い大学が中心になっています。

谷本 ●いわゆる「底辺校」になるほど就職問題が焦点になって大学が就職予備校化しないと生き残れないという考え方が出てきますね。手取り足取り、それこそ

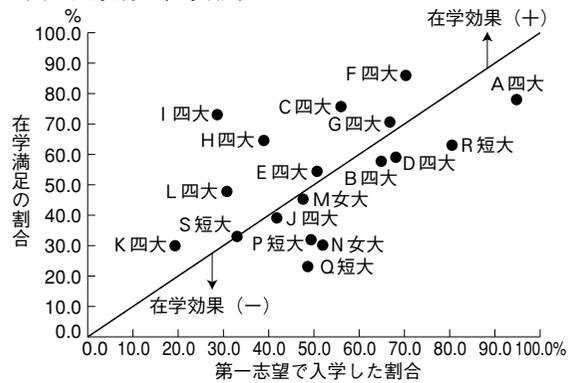
ビジネスマナーや履歴書の書き方など就職活動のノウハウをレクチャーすると学生の満足度が高まる。上位校はそういうことをしなくても就職できるから導入教育も実施しない、あるいは就職活動もほとんど援助しない。この両者には大きなギャップがありますね。

武内 ●本当は入学しやすい大学も見ないと上位校の特徴も見えないので、偏差値49以下の大学も多く加えて、今回とほぼ同じ内容の調査を今やっているところですよ。

それに関連したデータをご説明します。第一志望で入学した学生の割合をx軸に取って、大学に入ってから満足度

をy軸上に取って大学ごとにプロットしました。（図「大学別在学効果」）。第一志望率が低くても大学に入ってから満足度が高まる大学と、第一志望率は高くても入ってから満足度が低い大学があることがわかります。大学の在学効果がわかります。個人別では、第一志望で入ったかどうかと大学満足度を組み合わせると、いくつかのタイプを作っています

■図 大学別の在学効果



（「順調型」、「挫折引きずり型」等）。

谷本 ●私はいま学部で導入教育も担当していますが、高校生から大学に入学した時、新入生はまず大学が高校と違うことを感じます。これまでの学校とは違う、異空間としての大学との遭遇という体験が貴重だと思うんです。インシエーション、カルチャーショックといった、ある種の刺激を受けて初めて「生徒」は「学生」に変わる。しかし最近の傾向として、大学が高校の延長上になっていて学びのスタイルがあまり変わらない。昔の学生は大学に入学した時に何もケアしてもらえないから「自分で何とかしなきゃ」ともがいたが、今は大学が手厚くケアしてくれてはじめて「生徒」から「学生」に変われるようになってきている。それで学生が脆弱になる。同時に大学が新入生を「生徒」として扱って、脆弱な方向に持っていつてしまっているのかもしれないという印象すら受けることがあります。

導入教育と学生

武内 ●同志社では導入教育はどのようになさっているのでしょうか。導入教育をや

っている教員に聞いたところで、「1年生の時は高校生の延長でやり、ある時からガラッと転換する」ということでした。谷本 ●一般的な導入教育というレベルでしたら、たとえばレポートを書くにしても、高校生の段階でレポートを書く機会がないまま大学に来る。課題に対して自分で資料を集めて文章をまとめて出すという経験がない。それでまずレポートの書き方を教えてないといけない。資料をどうやって探すか、文章をどうまとめるか。極端な話、参考文献の出典表記法も知らないの、そこから指導します。司会 ●同志社大学の場合、最近は導入期教育をいろんな学部でやるようになりましたが、他大学に比べると取り組みは少し遅かったですね。圓月 ●そうですね。ある程度の学力が維持されている大学では、それほど導入教育の必要性に迫られなかったということですね。大学によっては学力の多様化や、ゆとり教育の影響もあり、学力の様相がすごく変わってきている。だからその補正が要求されるようになってきたということでしょう。



武内 清氏

たけうち・きよし／1944年千葉県生まれ。上智大学文学部教育学専攻教授。東京大学大学院教育学専攻修了。同大学助手、武蔵大学教授を経て1988年から現職。学生生活、生徒文化の調査を多数手がけ、2004年4月に『12大学学生調査－1997年と2003年の比較』を上智大学・学内共同研究報告書として刊行（研究代表：武内教授）。主な著書・論文に『キャンパスライフの今』（編著、玉川大学出版部）、「学生生活はいま」（IDE438号）、「学生のリアクションバー及びレポートの考察」（上智大学教育学論集38号）ほか多数。

司会●同志社は入試の多様化も早くなかったで、学生の学力格差も比較的少なかったんじゃないでしょうか。

### 新入生の居場所

谷本●導入教育が必要だと考えるもう一つの理由として、新入生が入学時に感じる「居場所の無さ」の解消があります。サークルに入ったら友人もできるのだけれど、何らかの理由でサークルに入らなかった場合は、同志社の、とくに社会科系学部は比較的授業のクラス規模が大きいため、かなり意識しないと授業で友だちをつくるのは難しい。そのために、地方出身の新入生などは非常に疎外感を持つ。だからそのような新入生に居場所を提供するという意味もあって導入教育の小さなクラスを用意して、そこで一緒

に語り合える友人や何らかの「居場所」をつくってやる。それで新入生を少し落ち着かせてやろうと考えたんです。

武内●とくに女子学生にとっては、お昼を誰と食べるかは大きな問題です。一人でお昼を食べるのは本当に惨めな気分の方です。友だちがクラスでできればいいのですが、できないとそのためにもサークルに入る人もいます。友だちができて大学を辞めていく学生がいるくらいです。

圓月●同志社では文系学部の1、2年生は京田辺キャンパスで学ぶのです。とても立派で広大なキャンパスなんです。けれどだけ疎外感も感じやすい。ですから、入学時、サークルが「登録相談」と称して出店します。そこで科目登録のやり方、どうやって友だちを見つかるかを教え

武内●確かにデータを見ても自由放任の大学と、丁寧に学生を支援する大学があって、丁寧に指導する大学の方が学生の満足度が高いです。ただし、あまりやりすぎてしまうと学生が受け身になってしまうので、学生が自分でやる余地を残すことは必要でしょう。

### 外国語クラスからみた学生

玉井●言文センターは最初の2年間の学生を見る機会が多いです。こういう「生徒化」する学生とか「学校化」する大学がやはり世の中の流れなのかなと感じます。外国語教育という面からみると学生の学力が多様化しただけでなく、やはり学生の質そのもの、それから社会が求めているものも今や全く変わっていると感じます。私が教えたのは約10年前

る。だから「居場所」を提供する機能はサークルなどが代行してくれていた。しかし、そういう非公式なやり方に依存するのは大学として能がない。入学直後から一緒にご飯を食べる人、そしてこの学部はどういう学部なのかを話し合える友人を見つけれられる仕組みを大学として、制度的に用意してあげるといってサービスピリットが必要でしょう。

谷本●「学び」だけではなく、施設とか制度とかを含めて大学をいかに活用することも新入生にきちんと教えてやる必要がありますね。大学に長年勤務している職員や教員にしてみれば、そんなことはマニュアルを見れば分かる、ここに書いてあるじゃないかと思いがちです。でも新入生は困ったときにどうすればいいのか、どこに何が書いてあるかすら分からない。だから最初に教えてやらなければいけない。

武内●アメリカの大学にはメンタリング制度がありますね。一対一で、先輩が後輩にいろいろ指導をするという制度です。もつと日本でも採り入れられるかもしれないですね。

圓月●同志社にも学生支援センターにメ

なんです、その頃は小テストなどをどう何回もやらなかったんです。今ではそんな授業は考えられない。「こういう具合にやるよ」って学生に伝えたら応えてくれるんですけども、そういう働きかけをしなくて、たとえば「3ページ予習してきなさい」と言うだけだと、多くの学生はやってこない。だから「こういうふうに予習をきなさい」「こうやるんですよ」ということを手取り足取り指導して、初めて学生も応えてくれる。

こうなつたのは大学がより多くの学生を獲得するために私たちが昔よりは多くの教育サービス、もつと学生に近づいた教育をしていかなければならないからでしょう。それとも社会そのものが何か質的に変化していて、大学に求められているもの、大学が輩出すべきだとされる人材が違ってきているのでしょうか。ベンチャー企業などが求められている状況を考えれば、むしろ時には学生を「好きなことを自分でやりなさい」「自由競争の場所ですよ」と突き放した方がよいのではないかとも思うのです。そこから生まれるのが社会の求めている人材ではないのかなと思うのです。



谷本 啓氏

たにもと・あきら／1971年生まれ。1994年大学商学部卒業。2000年大学商学研究科博士課程(後期課程)中退。専門は経営学。現在の研究課題は人的資源管理と労使関係の変容に関する研究。日本経営学会、日本労務学会、労務理論学会会員。主な著書・論文に「従業員の採用と昇格の管理」(島 弘編著「人的資源管理論」ミネルヴァ書房、2000年)、「人的資源管理生成の背景に関する一考察—第2次大戦後のアメリカ連邦政府による政策の影響を中心に—」(『同志社商学』第53号第5・6号、2002年)、「職能資格制度の形骸化と人事制度改革の課題」(木田融男、他編著「変容期の企業と社会—現代日本社会の再編—」八千代出版、2003年)ほか。

谷本●そこまでしなければならぬ時代になったのかなあ、とつくづく感じます。



圓月勝博氏

えんげつ・かつひろ／1958年生まれ。1980年大学文学部英文文学科卒業。1985年インディアナ大学大学院修士課程修了。専門は近代イギリス文学。現在の研究課題はミルトン、パニヤンと、ドライデンを中心にした17世紀英文学。教育開発センター所長、国際ミルトン・シンポジウム運営委員、日本ミルトン・センター実行委員、日本英文学会大会準備委員、大学基準協会相互評価委員を務める。主な著書・訳書に、*The Cambridge Companion to John Dryden*(Cambridge UP)、*Milton and the Terms of Liberty* (D. S. Brewer)、ロイ・ストロング『イングランドのルネサンス庭園』(ありな書房) ほか多数。

## 親の世代と学生

**武内**●一つの問題は、豊かな社会になつて親が何でも子どもに与えすぎるようになった。昔は欲しいものがあつてもなかなか買ってもらえませんでした。今は子どもが「ピアノが欲しい」と言う前に、もう親の方が先回りして用意してしまふ。親の世代は物が不足していた時代に育ち、そういう思いを子どもにさせたくないという気持ちで子どもを過保護に育ててきています。これからは逆に親は子に不足気味に与えることが必要なのかもしれない。

**中村**●私は学生が真面目になつてきたということは、親の世代が努力して下さった結果ではないかと思うのです。ところが、昔なら悪いことをしたら親を呼ん

で伝えたら問題は解決したのですが、今は親を呼びだすと余計に問題がこじれることが多い。親の世代が違つてきていて、親の価値観もずぶん変わつてきている。子どもはその親に教育されて20歳ぐらいになつてから、その他のことが考えられなくなつてしまつていく。そこから検証しないと「真面目になつてくれたのなら、結構」ということぐらいしか言えない部分があるのではないだろうか。

**圓月**●今の学生の親世代は60年代末から70年代の半ばぐらいに大学で過ごしています。ちょうどそのころが大学の第一次の大衆化ブームでしょう。大学論でいつたら、エリート大学からマス大学に変わつていく時の軌跡を経験したのが60年代

## ライフスタイルの変化と学生

**圓月**●もう一つ、社会自体が変わり、ライフスタイルのパターンが違つてきていると考えることもできるでしょう。これは俗説ですが、「年齢7かけ論」というのがあります。いまは男も女も30歳ぐらいになって、真剣に結婚を考え始めますが、これは昔で言うなら0・7をかけて21歳ぐらいの時にあたる。あるいは今から70歳ぐらいになったら引退かなと思ひ始めるんですが、昔だと0・7をかけて49ぐらい。人生50年といいましたが、夏目漱石や新島襄が亡くなつたのも49です。今は全体がこのように遅れてきているので生き急がなくてもいい。となるといまの20歳ぐらいがかつての14・15歳というのはオーバーにしても、大学生も高



玉井史絵氏

たまい・ふみえ／1986年大学文学部英文文学科卒業。2004年リーズ大学大学院博士課程修了。専門は19世紀イギリス小説。現在の研究課題はディケンズと帝国。日本英文学会、ディケンズ・フェローシップ日本支部会員。主な論文に“*Great Expectation: Democracy and the Problem of Social Inclusion*” (『ディケンズ・フェローシップ日本支部年報』第25号、2002年10月)、“*Globalisation and the Ideal of Home (1): Martin Chuzzlewit*” (『言語文化』第5巻第2号、2002年12月)、“*Globalisation and the Ideal of Home (2): Dombey and Son*” (『言語文化』第6巻第4号、2004年3月) ほか。

校生ぐらいで、「生徒」の感覚でゆつくりと勉強しながら楽しんでいるとみることもできる。フリーターに代わつて、この頃は「ニート」(Not in Employment, Education or Training) という新しい言葉もできました。とりあえず何もしないモラトリアムがずーっと延びていく。それをある程度許容できる社会ができてつあるともいえる。

**武内**●フリーターやニートについてですが、かつての団塊世代の親たちだと、自分は企業戦士として会社に入り、やりた

## 進路・就職と学生生活

**谷本**●今の学生は1・2回生から就職活動や進路への関心が高いですね。卒業後、たとえば会社で求められる人材とはどう

後半の学園紛争でした。それに対して90年代後半から起こっている今の大学改革は第二次の学園紛争で、かつては「学生」対「教員、当局」という形であったのが、今は「社会」対「大学」という形で軌轍が起こつている。今、マス大学からユニバーサル型の大学へと変わつてきたわけ

です。  
**司会**●「団塊の世代」が学生だったのは、だいたい60年代後半で、70年代前半は「シラケ世代」、今は…。

**圓月**●70年代から80年代にかけて学生だった、私たちに近いところに親の世代が来てますね。

**司会**●ちよつと、くびれた世代。

**圓月**●「くびれ世代」とも言われてますね。いずれにしても今の学生は、第一次の大学大衆化時代に価値観を形成した親たちが、自分たちにできたこと、できなかったことを自分の子どもたち、それも少子化した子どもに徹底的に叩き込んでいる。今の子どもたちは、私たちが予想できない形でその状況に反応しながら、新しい生き方を模索したり、とんでもない挫折を経験したりしているという

分にはできなかった夢を追いかけさせ、フリーターでもいいと甘くなつてしまします。次の世代の親は、子どもがフリーターやニートになつたら一生負け犬になつてしまつと、否定的なようですね。

**圓月**●たしかに私たちは「フリーターのライフスタイルの嘘」を見抜いてしまつている親の世代かもしれないので、「あれだけはなつたら負けだぞ」と言うかも知れませんがね。「団塊の世代」的価値観の破綻をいやと言うほど見ていますから(笑)。

いうものかわからないまま、とりあえず授業に出て良い成績を取つておこうとか、資格を取ろうとか、公務員の勉強を早めに始めなければ、などという意識があるようです。就職活動がいま厳しいという状況の中で、少しでも有利になるための手段として授業に真面目に出て頑張ろうかということでしょうか。

**中村**●親がそう思つてるから子どもは当たり前前にそう思つてる、と私は思いますね。



中村利男氏

なかむら・としお/1945年生まれ。1970年桐朋学園大学音楽学部卒業。専門は音声学、声楽、合唱指導。現在の研究課題は歌唱における心・技・体の探求。2001年から女子大学企画部長。大阪ザ・シンフォニーホールや京都コンサートホールでの女子大学定期演奏会の合唱指揮、女子大学125周年記念校歌集合唱指揮・録音(2001年)、神戸バプテスト教会でのバスソロ(2000年)、バリトン ソロ(2002年)など広範に演奏活動、作品発表。主な研究業績に「バリトンソロリサイタル」(1978年、神戸ユニオン教会)、「バリトンリサイタル」(1980年、京都府立文化芸術会館。1990年、京都府立府民ホールアルティ)ほか。

**司会**●リストラが続いた中で、親が企業の中で感じたことを入学前、あるいは在学中の子どもに対して話していることが、すごくストリートに子どもに入っているはずね。

**武内**●大学1・2年生で就職のことにすごく関心が高いのは、上智でも同じですね。

**中村**●この問題を考える時には大学に対する社会の中の位置づけが絶対に必要だと思うのです。高度成長型、右肩上がりの時代には、同志社もいわゆるマス教育の中で全部やっていくということが、素晴らしい力を発揮していた。現実就職についても、非常に同志社大学は良いという評価を得ていると思います。ただ、社会自身がそういう時代じゃなくなっていて、実学志向になってきていると思

ます。

### 女子高等教育の役割

**中村**●さきほど、女子学生の話題が少しでしたが、女子大学の学生部やキャリア・サポートセンターで聞きますと「うちの学生は真面目ですよ」と言っています。女子大学ではいま先生方がおっしゃった問題や課題を早い時期からすべて手をつけています。私は経営側、学校としても敏感にアンテナを張って、学生たちの意志と交流することがすごく大事だという気がしています。問題はそれをキャッチした時、どういう形で学生にリターンできるのか、そのシステムが必要ですね。

学生の实学志向の中でどうするかです。たとえば数年前から資格支援センタ

いうのは素晴らしい。ゲートが言ってますね、「男の善し悪しは天と地ぐらいの差、女の善し悪しは天国と地獄ぐらいの差がある」。これは私ではなくゲートが言ってるんです。彼は分かっているなあと思います(笑)。

**大学大衆化と学生の選択行動**  
**圓月**●いまの学生をみる場合に忘れてはならない点として、大学進学率の増加という要因があると思います。大学で知の探求だとか言っても、それは「嘘だ」と多くの学生が見抜いている。大学に来て熱い討論をしたらエリートになれるとは思っていない。ごく一部に古い型の学生さんもあるんですが、進学率が20%以下だった時とは違って、50%が入ってきた時、誰も彼もが学者になれるわけでもないし、大学卒業生全員に社会が高度専門職のポストを用意しているわけでもない。そしたら50%の一人として、せいぜいその上半分の位置を守るために、手堅く確実な就職や収入なんか得られることをしっかりとやる。そう冷静に、賢く見ているところもあると思うんです。

私のいる英文学科は卒業論文は選択制

ですが、卒業論文希望者はどんどん減っています。わざわざ苦勞して難しい選択科目を取る必要はないからです。実務に

関わったような科目で単位を取って、学部レベルで学校生活をきっぱりやめて、賢く生きていったらいいと考える。今の若者には過去の成功パターンを追求するというビジョンは共有されていない。だから古いパターンを押しつければ、「あのオジサン、何言ってるの」というふうな形になってくることもある。だから大学の役割自体も変わってくるし、大学院の役割や制度の見直しも必要になっていくということでしょう。

**中村**●論文は非常に細かく深くテーマを追及していったら、一つの評価が得られるものですが、それを続けていくと、(テーマの)すき間がだんだん無くなつてき

くを作りました。資格の学習講座を無料で受講できるシステムです。水曜日と土曜日、土曜日は学校を休日にしておりますけれども、そういう日に集中してやっています。最初1000人から始まり今は3000人ぐらい、学生の50%以上が資格支援の講座を受けております。実学的なキャリアサポートですので、コンピュータ教育や英会話とか就職に必要なスキルを身につけていくものをやっています。逆にそこまでやってしまうと、おんぶに抱っこに肩車、みたいな感じになつてきます(笑)。それは不要だとおっしゃる場合があるかもしれませんが。やはり女子大では、それを大事にしています。

もう一つは、女性がどれだけ優秀であるかということについて、男性社会であるところの日本の社会は、あまり考えないようにしてきている。そこは社会的に大間違いを犯しているんじゃないかと思うのです。試験答案を見ますと、もう女性の答案と男性の答案では出来が違う。世の中、ペーパーだけで判断されるのであれば完全に女性社会になりますね(笑)。それほど、いわゆるペーパー的には優秀

ますよね。果たして人間として生きていく上で、これと違う視点というものを私たち教員の中に持ちうる素地があるんでしょうか。いかがでしょうか。

**圓月**●学問自体が細分化しすぎているという傾向もありますね。文学研究でいうと「私は20世紀アメリカ女性作家の専門家だから、19世紀のイギリスの男性作家にはコメントしない」とか(笑)。

**中村**●ほんとうにね。この文学論は生きる人間のことを思っているのかな、というような感覚があるんじゃないですか。

**圓月**●文学の領域もそうですし、社会科学系の学問も多分そうじゃないかなと思っうんです。トータルな形で見る視点が欠けているところがありますね。教育で言っても90年代初めの大綱化の頃に学際化とか言っていて、学際研究やそういう組織が生まれたんですが、正直いつてうまく成果はあがってきていません。昔ながらの枠組みに教員も学生も逃げ込んでいつている面もあるんじゃないかな。

**谷本**●教養教育の見直しとかも、そういうところと関係しているのでしょうか。

**圓月**●そうですね。文科省がよく言ったりする「人間性の涵養」とか。確かに陳

腐な言葉ですが、もう一度トータルな形でとらえることが必要なかも知れません。

### 課題やテーマを選択する

**玉井**●学生はいつも不安を抱えていると私は思うんです。授業に出てくるといっても、教室に行くことによつて「何となくみんなと同じことをやっている」と確認できて安心感があるんだろうと思います。指導する方としても「こういうことをしなさい」と細かく言つてあげる方がむしろやり易い。特徴のあるクラスよりも、きめ細かな指導のほうがマニュアル化しやすい。社会からも資格を取得して、大学を出る時には良い成績で「TOEFL」等の高いスコアを持っているような学生がよいとされる。でも人生においてリスクを背負えるような力は、こういう教育の中から果たして生まれるんだろうかという疑問ももちます。

**圓月**●同志社のように多数の科目を設置すると不思議な現象が起こるんですが、きれいに散らばるのではなくて、かえつて特定科目に集中して巨大クラスができて上がってしまう。これは同志社に限らず

大規模大学の特徴です。みんなが取つてくるクラスを取りたがる人が増えてくる。自分で決めるのが怖い、という発想は確かにあると思います。

**司会**●さきほど卒論の話題が出ましたが、武内先生のお話で私が一番印象的なのは「課題が与えられた場合に、それを素直に受け取つて頑張れる」ということです。学生に「卒論のテーマは各自で自由に決めなさい」と言いますと、自分で決めることを嫌がる学生が年々増えている。導入教育から手取り足取りの教育、与えられた課題やテーマばかり卒業までずっとこなしてきて、それで企業とか社会に出た時には何も決断できないことになってしまふ。どうやって自分で課題やテーマを決めさせてチャレンジできる学生に転換させるのかという課題があるように感じますね。

**圓月**●『なぜ若者は決められないのか』という本がありました。いまの若者の一つの特徴は「決められない子どもたち」ということですね。だから導入教育の役割は「決めることの大変さ、大事さ」、あるいはその「決め方」自体を教えるあげることです。この学部に来てこの学科

に来たら、こういうこととこういうことが勉強できるんです。あなたが一番興味を持ってそうなことは何か。それを決めるためにはどういふ本を読めばいいか、ということから一度教えてあげない。私なら作家の名前を教えてあげ、「この作家ならこんな問題を扱えるかもしれないよ、やってみないかね」と言つてやる。決めるためのノウハウを教えてあげなければいけないんじゃないか、という気がします。

### 学生の自己形成と読書

**司会**●いま多くの学生は本を読む習慣を形成しないまま卒業しますね。武内先生のお話で高校でやつていない子は恋愛さえも大学でできない。同じように高校までに読書習慣を獲得しなかつたら、大学でも本を読まないという指摘はすごく衝撃的でした。どうすれば本好きな学生になり、自分で本を選んで読むような学生になるか。本を読むことにはリスクがあります。時間をかけて苦労して読んだけど、結局くだらん本だったとか。そういうリスクさえ学生はもうとらないのでしょうか。アドバイスをいただけませんか。

か。

**武内**●私たちの研究グループでは武蔵野大学の岩田弘三氏が、大学生協や文科省のデータを使って、書籍代の推移を調べています。書籍代はどんどん減つていきます。実感としても本当に学生は本を読まなくなつていきます。教科書だつたら買いますが、自分で何か本を選んで買って読む学生は本当に少ないですね。「読む」というのは、最初に少し強制が必要かもしれないですね。

**圓月**●私たちの分野の新しい学問に、読書史とか書物史という学問が出てきています。それも、そういう背景があるんだと思います。読書習慣の形成がどのように行われるか。昔の書物文化は「知の特権」的な地位を持っていた。書物を読むことが知識人になることであり、知識人は書物を読むものだということ。いまは必ずしもそうではなくなつてきた。では、書物文化というのは何だったのかをいろんな形で考えていこうということ。新しい学問が出てきています。それから、最近、多くの小学校では朝の30分「読書の時間」を作つて、小さい頃から読書習慣をもう一度文化としてつくる

試みをしようとしています。そういう成果が上がつてきた時、あらためて読書文化がある程度復活するとか、維持できるのかもしれないですね。社会制度の上で読書習慣というものを、きちつと位置づけていくということですね。

**中村**●答えが容易に手に入る、「与えられすぎる」時代なのかもしれないですね。21世紀になつたら戦争なんか無くなるのかなと思つてたけど、ますますドンパチやつてますもん。やっぱ人間つて、大して変わりませぬね。答えだけ、コンピュータですぐに出てくる時代になつてきましたからね。

**圓月**●そう、書物よりインターネットの方が便利なんです。書物は辛気くさい。300ページあったとしたら、どこを引用するかずつと考えて何日かけて読まなければならぬ(笑)。これに対して検索ツールをつかえば必要なところが5秒で出てくるわけです。だから「書物のどこが優れているのか」ということを教えていかないと、若い人にとっては念仏に聞こえてしまふ。書物を読むっていうのはこういう点が優れているんだよ、インターネットにはないこういう知識のあり

方があるんだよということを、粘り強く語り続ける事が必要なんです。そう思っている大学の教員が熱心に語り続けないといけないんじゃないかと、私は思うんです。

**玉井**●大学の教員は書物が絶対大事だと思つていても、社会が必ずしもそう思つていなければ、学生にとっては全然意味のないことになるのではないですか。読書でも、果たしてそんなに真面目に本を読む人を、本当に社会は求めているのでしょうか。

**中村**●日本人は求めていますよ。  
**玉井**●求めていますか。やはりそうなんじゃないか。

**武内**●学生の中には「そんな辛気くさい本を読むよりは、いろいろな人にも会つて学んだ方が広い社会体験になる」という意見もあります。けれども今生きている人だけでなく、過去のいろいろな人にも会つて学んだ方が広い社会体験になります。また、情報を整理して一つの結論を出すというのは、企業で求められている能力です。会社の中で何かを企画する時、テーマを決めて多くの情報の中から選定して、一つの企画を練り上げていき

ます。これは、大学の中でレポートや卒業論を書いたりすることと同じことでしょうか。社会での仕事は大学で学んだことが

## 企業の要請―教養と専門性

司会●日本経済新聞は企業の第一線の人たちが良く読んでいる新聞ですが、日曜日に読書欄があります。毎週10冊紹介されるんですが、経済系の本はそのうち2冊しか紹介されない。仏教美術とかインカ文明の本だとか、およそ日々の経済の動きとはまったく関係ない本が必ず8冊は紹介されます。それは日経新聞のビジネスマンに対するどんなメッセージなのかと、私はいつも考えるんです。しかし同じ日経新聞が社説では「大学はもっと専門化された知識を教えろ、学生は講義にださせろ」という(笑)。教養や人格形成と、専門性と、そのどちらもてんでに言う。そこでね、96年に当時の日経連が21世紀の日本企業は「三層の労働力」から構成されるということを言い出しました。そのうち基幹的な部分は従来型のゼネラリストで、教養あり、なおかつ専門性もある層。その次の層が、与えられた課題を真面目にやる高度専門職。いま

基礎になっていきます。そういうことは教師が教えていかなければならないと思います。

の大学改革はこの2番目の層だけに照準を合わせた改革になりがちなのではないのでしょうか。第一の層、基幹的な将来の幹部になる人々を輩出する大学教育はどこでおこなわれるのでしょうか。

谷本●企業の少なくとも文系採用での学生の評価ポイントは、コミュニケーション能力や熱意、積極性などが重視されていて、専門性や学力の評価はそれほど高くないですね。

司会●出てくるとしても5番目、6番目。谷本●ビジネスでは対人コミュニケーションがとても大事で、だからその人が大学時代までにどれだけ豊かな学生生活を過ごしたか、本を読んでいるかなことを知っているとか、それこそ「人間力」というレベルの力が必要と考えられているようですね。

圓月●立花隆さんは「東大生はバカになったか」の中で、「どういう人が優れている」かという点、それは「社交の場

ちゃんとしやべれる人」という。日本の外交下手も同じ問題です。正式の会議の場ではちゃんとできるんですが、後からインフォーマルな場で信頼感を与えて、交渉することができない。アメリカなどの超一流のビジネス・スクールでは、単にビジネスのテクニックだけを教えているわけではないですね。やはり英会話能力とかそういう問題じゃなくて、対人関係とかコミュニケーション能力には非常に深い意味がある。いま一番大事なのかもしれない。

谷本●企業でも中核となる人たち、最終的にゼネラリストとして経営者になる人は経済や社会のいろいろな動向、あるいは国際社会、異文化の差異なども理解した上で意思決定を行わなくてはならない。そうすると教養がものすごく求められてくる。しかし同時に的確な状況判断のためには専門知識も必要です。そのような人材育成のために、果たして大学がどこまで制度として教育を担えるかという問題もあります。同志社の2万人以上の学生全員にそのような教育ができるかという点、それも難しいのではないのでしょうか。

## 学生の多様なニーズと大学のあり方

玉井●そもそも、そういうのは「学校化」した大学で教えられるのでしょうか。私たちはサービスを提供することばかり考えているんですが、どこかで「提供しない」というサービスイコールという視点も要るのではないかと気がするんです。たとえば1年生がバツと田辺キャンパスに放り出された時の不安感というのはすごく

よく分かるんですが、そこで「心配しないでいいよ、こういうふうにやっていたら大丈夫だよ」と言うのも一つのサービスマンでしようけども、「これに乗れ越えろ」というのも、逆にもしかしたら一つのサービスマンかもしれないという気がするんです。

圓月●いまは「なぜ提供しないか」ということを説明しないといけないということでしょう。なぜ私は愛想悪いかということ、愛想良く説明する技術を身につけることが教員も職員も、そして大学執行部にも必要になってくる。「私のところはこの教育方針だからこういうサービスマンは提供していません、よろしく」ということを感じよく言わないといけない(笑)。

中村●むしろ昔の同志社というのは、そういうことが得意だったんじゃないですか。それが得意だったから、同志社であり得た。

圓月●阿吽の呼吸で、同志社ファミリー的な雰囲気の中で、学生さんも職員も教員も皆、共通の価値を分かち合っていた

んでしようね。いまは必ずしもそれが共有できていない。だから窓口で学生と職員との間でトラブルがおきることがあつたりするんですが、互いに共有できていない何かのカウンター越しのトラブルの中にあると思います。

武内●潮木先生の言う「知的コミュニケーション」というのは、学生の視点を取り入れて、対等に学生の問題意識も入れて探究していく姿勢のことだと思います。さらにサークル活動とか、その他の大学内のいろいろな活動を大学が背後からバックアップして、学生がそこで学んだことを企業も評価している。そういう形で学生も企業に入り、役立つものを得ています。あまり教室での勉強だけに偏るのではなく、学生の大学生活全体をきちんとバックアップしたいものです。

## 学生ニーズのとらえ方

武内●学生のニーズは多様化していると思います。同志社や上智のように、通う大学が好きで、生活のほとんどを大学と関連づけている学生もいます。また一方で、大学生活は自分の生活全体の一つのパーツ(部分)に過ぎないという学生も



出席の5人(左から圓月、玉井、武内、中村、谷本の各氏)

います。学生は大学に生活のどの程度の部分を満たしてほしいと考えているのか、学生のニーズの多様性、学生の生活全体を見て、大学が果たすべき役割を探求するという視点も必要だと思います。

**圓月** ●「学生の多様なニーズ」を知ることは大事で、そのために同志社でも授業評価アンケートなどしているのですが、そこで学生が書いて来るニーズがすべてなのかどうか。学生が自分では気がついていないニーズがあるかもしれないということも、もう一度自信を持って押し出していくべきだという気もするんです。90年代以降の大学改革で大学教員が自信を失ったところがあって、学生に合わせることでばかりを考えてしまっているけども、自分が18歳の時に気づいていたニーズなんていうのは、いまから思えばたかが知れていた。だから、情緒的、懐古的にならずに、たとえば、書物文化からはインターネットでは学べないこういうものが学べるんだ、ということを引きちんと大人が教えていく。そして、ニーズ自体をまた新たに作っていくことも、これからの大学で必要じゃないでしょうか。

**中村** ●少なくとも今の「真面目化」というのは、20年前に今の親たちがめざしたところの一つの結論で、それについて足りないところを次の世代はまた補っていかねばならないということなんじゃないかな。卒業生が減るのだから就職が楽になつてよいと思つてましたものね、昔は。ところが全然そんなことないですね。そういうことも含めて、ちよつとりセットしなければいけないのでしょうか。

**谷本** ●武内先生のご意見で「大学は自由と同時にきびしい試験の場であつてこそ、青年を大人にするイニシエーションの場として機能する」という部分。今まで全部思い通りにいっていたのに、大学へ来たら思い通りにいかないことがある、あるいは乗り越えていかねばならない壁がある。そういう部分を意図的につくる必要もあるのかなと思います。ただしそれを乗り越えるためにはどうすればいいかという情報ももちろんしっかり提供する必要がある。それを具体的にどうすればよいかについては、まだイメージがつかれないですが。

**玉井** ●本当に難しいですね。  
**武内** ●いま各大学とも、卒論はだんだん

書かなくなつてきていますが、もしかすると卒論をあえて必修化することが必要かもしれません。

**谷本** ●また、大学は社会そのものではないけれど、この閉じられた空間とも言える大学の中で、大人として学生が自分で選択したことについては、その結果に対して自分である程度責任を取りなさいよ、ということも教育の一環なのかなとも思います。

**司会** ●武内先生、最後に議論の感想ですが、あるいは同志社の教員へのアドバイスなど、一言お願いします。

**武内** ●今日は、私たちの拙い調査報告を話題に取り上げていただきありがとうございます。今後の学生調査をすすめて、大学教育のあり方について考える上で、参考になるご意見をたくさんいただきました。私立大学の共通の問題を実感した座談会でもありました。先生方のお話から同志社大学のよき伝統と学生への温かい配慮を十分知ることができました。上智大学でも、取り入れたらいいと思うことがたくさんありました。本日は、お招きいただきありがとうございます。  
**司会** ●ありがとうございます。